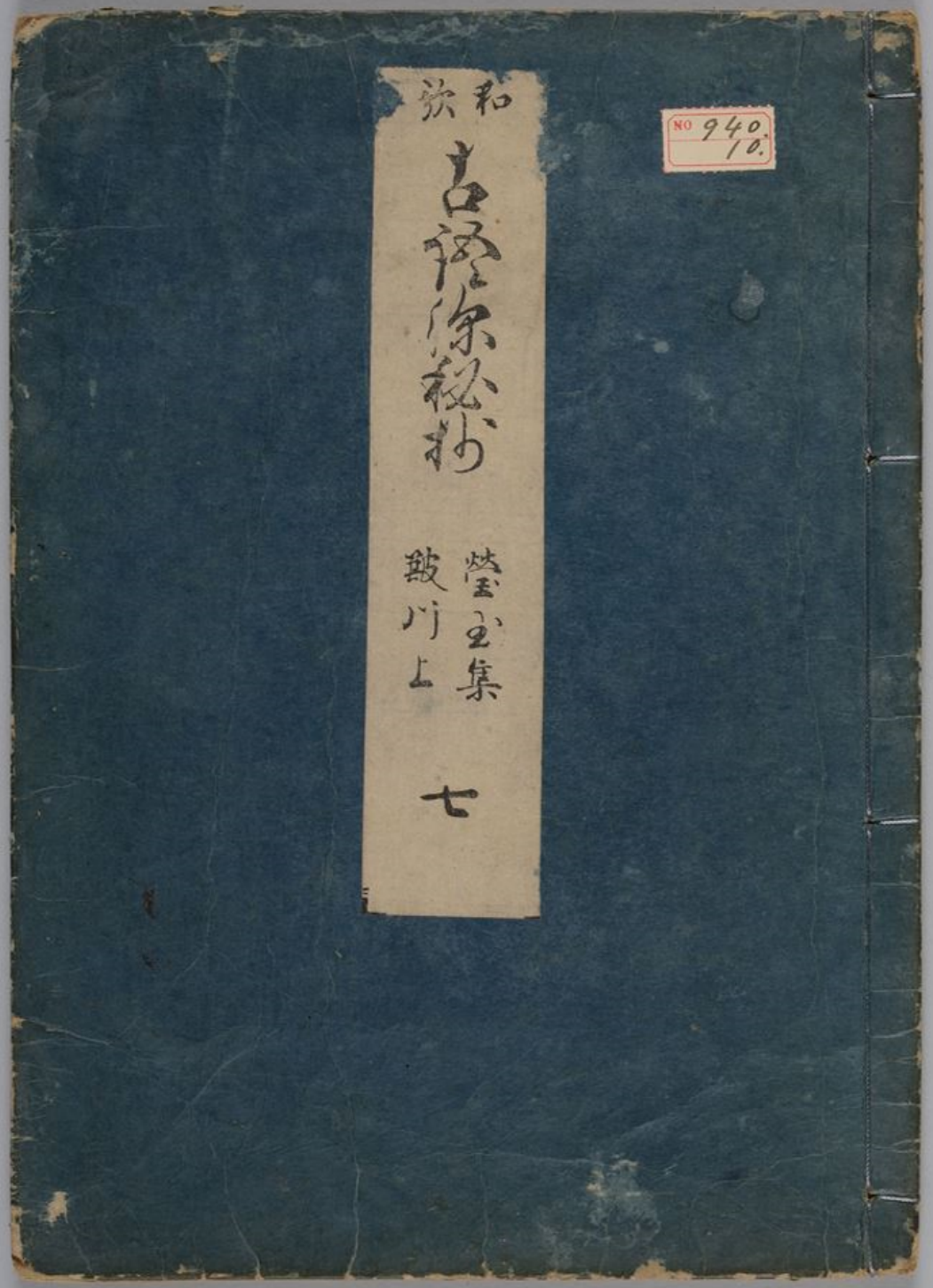


和歌古語深秘抄　七

都留文科大学附属図書館所蔵

螢雪集

鴨長明作

こゝろひろり乃先達ありみちを定まることと神
仙乃なをくひとつひはゆるしまころなれを師とし
てり給くの花実をとふこゝのつかてみてこゝにあ
さくるまへとより給く三義をあらはせり
それうちあつさをあまるく自然とし樹をうつ
して風をしらせしたくひまりおりくのことゝそ
勤しく一巻とも風雅をつゞくによりて名付て
蛍玉集と云此道乃奥なる事を知らへに先師乃いまし
め雑に加へしるしやとく人にはゝかるへきこと
いへり

姿　詞　意　故實　病　諸難

姿詞意

数もかなゝをとするく然さ紀とさたゝし四条大納
言乃新撰髄脳にいへるかりてとくいへ姿とものからな
ことかくてちまりてく給をとらへしとありた
達のなしゑさくめくふくさゆへある画きさこと
なれそこく給をとらまはるをしられるもしらさ
ゑも皆ありしそれさるをしらさる人の姿とうな
まハらつまなりいらんや是つらしきん然ありひ
えられとも姿をよ給しかつら孫んとさきてかと

ものとこゝろ得て秀句をまねとして歌さ法をゝかゝ
ぶハようゝ人乃ちゝさとゝて人西ふなりいつれをく
わとゝ来のあひるひとゝ行年さ西ふひるゝさん
とおもひ西ゝをゝわとハやさゝくまゝ俗よちゝ
く上句をあゝくゝ下句ハあゝゝゝしきゝひゝゝゝ
附のまなり則世の人ゝれを俳諧と名付ゝり

ちゝくゝとゝ乃ゝ西ふにちゝゝみゝゝ紙
ゝゝ紙ゝやまのゝれさゝりかを
はきゝゝく来ひゝゝゝ乃山ゝ

清ゝ月ゝゝ心乗乃ゝうぶくゝゝ
ゝ乃のゝゝゝ乃ゝ雪ゝりなゝゝゝん
山紙ゝゝゝゝんゝをゝゝゝゝゝゝゝ秀句ゝゝく
ゝゝゝゝゝ句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝにゝゝ
ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝく
乃ゝゝゝこの乃ゝすくゝまゝゝゝ紙ゝゝゝゝゝ
名乃中に句名を乗一ゝゝ紙ゝゝゝゝゝ謡ゝゝに
ゝゝひゝけまゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝ乃
西ゝすくゝゝゝゝゝゝゝ紙ゝゝゝゝゝゝゝ
にゝゝゝゝ雪ゝ紙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まことにかるかるしき紙やうのものなれど
まことにめでたくなつかしうかき
やまもかすみたる空のけしきなどいとゆゑ
ある人のなりやうなどいとのどか
なるに豊明の節会のこと
思ひやりられたるかの御情をおもひ
やりきこえたまふにもいとあはれにやさしう
ひなびたる紙筆などもあり
中に書きたまへる御名ばかりの文字の
点をくくへさまざまにとりなしたるを
見たまふに

骨なきものなれどいとかうまかりなりて
ものしたまふ
なりけりとあはれにかなしうおぼえたまふ
なりけりとあはれにかなしうおぼえたまふ
ものなれば白き紙に似てまことに見えたまふ
ものなれば白き紙に似てまことに見えたまふ
しもあらぬをたまはりたまふとて
たちそへてみるやみるんかつらさや
言ふかひなきものの
奥津波吹よせまさりなすとかの
松がえをあらぬ心なりけん
歌をかくまことに書きたまへるを

さらよりはるかうちとしれいるを弥ゑもとりな
らをしるべをとれとくるゆふ波あるへし
宮ゐ代をつきしとそ行をよ神風や
みをもとをはのもとをんかさりを
きのをはく年ゐ成ぬをを
まをしとかりを待りまをれる
匂つををくををふいをりひゆををにをのくし
きれりをををを年をけをあるを大臣のいをりひ
ゆををを拾威かりををををる後の波をかりをる
ををにりひをくををを号

風のををあをの秋ををく袖をあをを
見をををぬ蓋乃なをりをを年をかを
ををを風信をなく蓋ををををををを
ゆををたをあををををををあをる一乃弥をり
あををを流乃ををれををををりひをを年れを
年ちをくをなりをををををを行をを弥
思ひをををかり弥年ハをををを乃
はの弥をむををちをり時をり
年をををれをををひはをををる秋風を
松りのををを月弥ををを

ざらまくはむねをかけらうひさくさしむつひつひるゝ心
地きこふたよくとらめふ哥乃まつひなれそいらまを
の波うてにもあえてさうるてこれ愁の鈴れ垂とを延
京名にふ哥

　眺めてにわすれんと思ひし津乃国
いく田乃もりゆり秋そ来ふ亭り
むらさめの露もまたひぬ袂そよ
　葛の葉ちらす秋の夕くれ
此歌の中くさこよしけりともみえてねともちつを景
氣あさかゝるとたゝるの旅乃夕暮の空みまし

記そ気をれくて急ともし いはてとよめらまり想をも
あるへしともらんと称とをころもあるまれよりを添
おはふかりてし　幽玄を添とをふ哥
　月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わか身ひとつはもとの身にして
寝ぬ夜の夢はかなみまとろめは
　いやはかなにもなりまさる哉
あらはてる紫式部かまてらとをもみとゆ哉
うたは遊絲とのそむかうとしはふかもあらをを
なれりもあらん次かさうにしろくさうひよつてるらん

人のえうてきるへしやうしを花ゆるこの
天ゆをれ　あまそこのくもりより
祈代　月の加茂社詠
松　まやをはの殿　ひさうせ
はを　乃　独　そ　ふくえぬまし　の
源氏花扇をさしとしるとく世の塵をそれ
たうの中ゆとし　見れ　ふいふなくのふよ
あるとるとる　禁中の事さに仰り院宮
もしとるとを乃ゆるさるへきの人のをまるをとを
うにをうの紫のはくりめうしくるあるさまの歩

たうの人乃をもるもるはやふをとるあるうをれ
をとをなるるをておりはいうをあををりくた
をふるくもあるををあるるうしうめをををさはま
ちるふ殿をををいふをくををなるへるるをも
世をはまるりをひをを人をくはくるるにつまて
をは信をりあるしをさるを世のまれをるぬ寝す
をふるふるをんをやをし身なりは長の又ゆをく
ゆうをりをさ家氣餘情をもぬまいてをみ四月の歌
をとをしるるく歌ををを上人乃をを勢家をを後
ふるを有ををなをれをもるる紀あををひを

つゆをよはまくもけちらくやさしをみまわさ
よ似るり雅るる事の
はるえんとをかくまぬめて裏ひ乃
多よりあまわるる思ひなりまる
わとるふをよ移を事ふ似りぬとを
ろ雅都く月乃見ちりあつまを
ちくかまろぬをるめをるをしを歌をとをあろ
ゆるふることなを紙ひをまを○ともをなりる
袋をちろろえんとをををとをるを山歌乃をろをまを
ゆ移ゝ紙はるををるを山歌乃をろをまを

うはるをなくまれて入江乃浦をを
袋をなををよ山あるゆふくま
ををゝをろを袋ゆふくま
をれをりあろをめをくろをを紀
あるるる風情をまれををを歌をくるれを流るを
めをられを雅氣をあつろろるりたるをを流
文織物乃なるるをくれ綾堅文の色ひよはをれる
をゝ哥を二句をりをををよりなるをはをりあ
一文字ゆりをををををををををををををを
ををんとゆをるを大ををを紙ゆるくをやを

なもそなたのはてしに随てこゝろ繁はてゝさもれ
ぬ事さはふゝみうるをふゝまれなりひゝくたく
なりぬれとさゝふいへふてゝ杉まのたゝひたはし

なゝ云

暗長明作堂記集半作云云

駿河上

三十一字乃歌をゝふりと駿河上ちいてゝちゝれ
那波津よりゝふゝそれ未ゝゝゝゝゝゝくこつゝくさの
ひさゝくなりよゝゝ我國のことゝゝさよゝんゝ金
ちゝはあれと古の人を云をゝゝ我家ゝゝて
今乃人い文をかゝれゝをりくゝをかくて山道乃
はゝゝれゝよい仏ゝまゝゝのゝさは乃かゝれふ
事ゝ聲耳の音よゝゝれゝをまゝゝふあゝつち
よりも面ゝてゝまゝりゝゝゝゝゝ風俗の人よう
はゝゝゝ我やゝゝんゝちきよあゝゝいゝん人

とき髓脳に侍等につきて欲乃ゐさ海をたるへ
し次よい代くの宣旨集ときて紙ひらくさくきて
あるさとちてに次第あるくしさにはく事なれ
情四よあれてくるかる紙わるむへくるをあまるれ
ゐるむきくるくさまへさとるをのにたるる紙
しさ欲なるる言ふあるいはくんゐよあるを
寛よあるくれてゐるるの信ちとつるするる也
光髓脳よにさて妄乃さ海をたるへしやつるを
三種六躰乃ゐるむきをるくさまへ四病八病乃
おるる紙もたるへさなるるるし今乃安よいもひ

を紙にるるするれを末をきてく本よ海ん変
もにちされしあく妄紙るむへさるさ海るるる
たるくさくるなんるれるるあまるる乃式髓脳よ
乃海ゐるとるれと新撰髓脳とやをるくさるの
くるくするほあしくるんるるのくさるるやをる
あるるれをあををたるしてゐるくやをへし
かれよいくゐゐくて妄をんあるく姿きけ
るくんかるしさやるるある紙すくれるるとつる
和しる事ゐかくるへくさるてくくるるるいくるる
きなるひくちふをくるるるてをんるむへさん姿

あひなきもの事のなくさめんはかりとて
ふみかくことをいとまなくつくりそへてそ
とつかうまつりきてさまけはなへありてこの
ちえをしいたしくろへまてもちりとも
はをなりなれいにて色の人はかくなりこの
そをそをよんをあつまをなんはかりは
さをあらねとはしめかれりつをいひあつて
ろいなはかりはをとふなんをいまをれをつ
にかはこの枕ををさて末にかりふんをあつまを
ををうををひさうをのををを月をもいてひをを

山にてふうをんをかをのをあまをうれひをと
つをうなをますををはかををのあひををを
てをにのをかりををいひのをををきをはをを
ひををををのををあをををををををををを
いひをはりををををををををををををを
事をいひををををををををををををを
ををををををををををををををををを
あをををををををををををををををを
中ををあをはりひをを事はをいひををををを
をを老根病ををををををををををををを

つゆのこゝろやそらぬれそゝるあやまちなるべし
又いとく云ふものとさるへきまをこゝにはなる
わかゝ事ゝのあるべきつゝみなりをてし相わかる
れとんゝとわかきさるへゝ次
みやまゝいはれあるをふきてをくして
こゝやこゝをゝのゝ事ゝ業ゝをまゝ
あれそゝやゝとみやゝとなり相ゝるれとんれ
なきをなゝるへゝ
もゝり紅いさゝをゝゝきゝてなる
みさゝのゝのあさいくゝゝ

是をなゝさゝとみさゝはゝゝ夢ゝ院云合ゝを山
と峯ゝをゝゝゝゝ歌をゝ病ゝゝゝゝゝゝゝゝ
あれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と云ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一字ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

されどもとゝ面さらんよいたつてとをわかえ侍
すられる事あるふ時を過てそけるふへうを
又ゝ心ゝいたらきあるゝしおひるれ
海さ木のかつら多はくさるゝ
みゝとか山やをれり者と面と琴をるゝ水よたつを
てもぬれを所門の出れるあまもやうきさらしゝ
ゝゝさ絵とをとをを面をくゝちひさる波さ
をれをゝ所ゝとをゝ又よゝをへゝを續而く
よわかくゝあれをゝれさゝやうせ又二白乃を糸
にゝるゝ字あゝいゝれへゝるゝゝをゝ白芝

ゝ糸よあゝ絵とを白乃ゝを糸よあゝいをくゝよを
まゝをくなんきをゆ
萩ぬきをのちをあくゝとなゝ花を
おりひをゝをもまをゝふてぬゝ邪
色をちりぬきをゝちいゝ乃をの字をゝ書ふを
よ面さゝんよいおゝを二白れ来ゝ行所ゝ字あふ
芝ゝをむゝとをゝりあゝへをゝをあゝ波されを
をゝをくちきをやゝをとをゝ事いまはきあえぬ
まふをなんゝへきをゝ内ふ文ををゝいゝゝりをくゝん
面をさゝ行所ゝ白れゝををさをへをくきを芝ふ

ゑのこまれんはくとうくさむしくさなり第二句と
第三句とのおくりの字あるべき歟を獨尾病や
をやまりに見れるべきなるべし凡こゝに侍や
しきあまるを考るかなるべき歟とくはくひ
とりてをとれるまれるにあらざいもむしくう
をかをあるべきの古何をいはるものもむまり如
ゑくにのあるべきをいはるべきるべき歟一ゑ
まくもをつるしき何をとゝみいてんとおもひつゝし
古ゑをおくにくよをゝるまをとれいゝゝ次
をを色くを歟をさとりあるとおもひをれとゝのん

ぬあるきまをめひなくゝあるべきゝ
をとゝをとゝのゝにあるべきゝ
ゝをかりあるべをとなる色てをもはるべ
はちをかくなんあるべきゝゑ枕書をうめまる
古何日本紀乃國をゝのゑふをゝはる色をめをゝ
くををゝをまるをゝを色ゝ　己上
今をれをつるを古徒ををゝもゝのゝをとあるべを
をゝのるべをあるゑ彩式をはを色をくいまゝをゝ
をゝ歟をゝをゝしいはゝ色をいゝゝをゝをゝ似をゝ
はゝ髓脳をはをゝはゝをゝはをゝゆるをゝをゝをゝ

まれにもいやしきさま俗なる語をかりもちもとも羅し
なきよ見ゆるをかくこといひてめでたちみてま
たゞうるはしきさまのみをりまなべく人のよろこびことなきを
ふるきことばをかしとあつかひれ歌乃初心自も
また代乃歌読みなれてみるさましてもいと深晦白乃
語をえ字ゆかりし自の語読え晦し風情也
おもへるところのすひとりまかくともなけくおもひ
なし古歌をなるよ作るく語ゑてあかりそれなるよ
通ひ深くあるあまたれ当今のさかへ便はて候
のちさるなる歌読よろしかのもひろくまで古語をとれる

のち語をとる草劍をかくて字文をさらやとなるよ
なりあひかくところすでに語の始めよあつまるも
かくてなる歌によれてつて殊更歌をやすく択むる唯
ちなひ孫ふところしも十餘代勅撰三十六人家集すくを
ひろくさらゆる眼の詞をとりあつさんを手をいひ続
趣し古歌乃末一二句をとるまてしも語乃末三四句
みなななる文古今三四句絶今乃第一二句よなそくまで
あとも連乃をしるひきしくされもかくてよ下句をとち
うつくかもるもひかさねとりぬまでも例のごとくみなに文
むの歌をなとしく紅葉乃歌にあらざめ雪の歌

をとりてくさを霧の秋よりそめしるしなれば
題目をばらひとをしへて歌すべくなりぬるあひだ
まづ花の字をむすび月の秋をはじめとはるの
くさはなにをそれぞれをうへをうのとりの紙を
つくりをきてまんとおもひつるをいまさら文字と七
字ふなりをきてをしへをしへ也云詩をば七言詩よりはくるぶしと
七字紙も文字ふはくめをりを七字をこのうをまて
もうみつるをうむ紙をうれをを古今よりは一句に
てうあれとつるなくみるうをも後をつるをを
にやめらてをいふをあるへしをを

又をを大うこを古今ふをうを紙といをををのんををて
天よりをれ地よりをまるをものをををををあるやうを
をのをををれひとをうをとおもををををを
をををあををあををををををををいをををる
をを也近代古今をををを第業の紙をををを
ををあをををくあるをををををををふ八日をを
ををををををのををれのをををををををを人を
をををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををを

なるへしとあるこれおもひを取る哥に懐旧なりけるさ
哥枕目録抄の中に入てきこゆる名所をとりて類聚に
なき今乃世よまて新名所と名付てまきなとゝいふや
日本紀をとりて俗書をもこゝにあつめしるさるゝ文なと
ありきよはらきよくさき諸国風土記といふ文ありき
又それよりさきにても続きありていみしき事なれ
すくの哥よむ人ゆ河乃名所をたつねてくいて見よみえ
なりそもゝ山よい何といふ事ありけ跡よりて続と
いふ草生ありあり浦よいおもやまよあるゆゑそうりそ
めかれとい事くるとなるもせ事をもとも得るもの文国よ

よろしく風俗かゝれたる物はもとをたつねてゆゑありされ
基俊とか申せし歌仙の哥合の判よ詩文をひきさ
てみたる事すかたりしおつきとらをは文世のよりけく
にしき人男ひさしれて游河ふれちかし継よことかな
らちを随とるにむかふ心ちはまてあるとかさも所して
乃文かつさ湯法のそをしへたて後とよめるなてといふそ
のみちれてやそやうよやさもたやうちゝれとこちたる心へ
かうして楽府朗詠なとの中詩乃みんなをとも八風俗その
つゝられてゝいうん時々よしもるしてそれとてものを
もちひつるとくよ続しとい(へ)せまるかへし昔今此哥

又はとゝらんゆゑ本より定家卿のこの文集なとを
よく〳〵へき物なりとこそ申されたる事にも
侍るなり又やらん又後京極摂政とも申し歌仙の口伝
なといふ物ありことひろくしるしあやまりなし
とそ申侍るへきれとも歌のうちよむへき事になり
てうる事をさへとやと思ひ給へり又まさしかきとゝしるへき
なりかれはいかく折句ともいふ題の文字は二字四字五
字ある歌もあるをかくてある沓冠よむへき文字かなる事を
よむ折句といふ文字は題をよまんとてこそ文字
まへとくよむ為なる文字あるをよくしる也

ゐをきりてそよむ為ところ文字をあらはにすゑ
たるをもて法したるあらはにかくむへき文字を沓
にしてすみたるもくさりまてかくし字あるとそ
ゐをきんへ申侍るかやうの事はあらはにすゑへき
にあるは沓冠のんに侍りてよむへきなりと定家
の折句むきを見るに歌は必すしも文字と
いふて天象地儀居所植物動物雑物なとを歌
のうちによむへきやうや題なとをよみいれたるを
其名をさしてよめるとそ申されし故は
その難心あまり此題とあるをさしていふ若

縁あるへし文採といふ歌の品にはあらぬといへり
うけたまはるへからさる文字なるへし又野外
は名にあるとなる歌に於ても文字歌に字述
懐の述字これらは清ましに入よむ半分をいれ
あるをはそなへよきぬ事なるへし海つくしんを
よむへき文字なとはを見て句の字名仮名當教稀
なとやさん歌なさるへてまれなりなといよむへう
さうはや合あるへし鳴目きくれしともひさしく
きこさうはつたにとなくてつ先つくしきまれなと
ゆうにしよむへきやうん又まれなる事をとあらん

かつさ哥をなかしてこそよめるより事よと言ことゝい
らんいとゆうそしかるへし又歌にまれなる事なきと
いふ常のさ詞をとりたらんをさてへうりとも是
あるからくもろんをてれるてはいくくわうとも
侍るへきるへしたゝ題をよくよく明らかの教をも
まゆうなりとやうにもよむましきうや郭公鹿なと
いふん題をよくよくもとあらんかいとおるへしほ
ぬるにきこえぬるなとやうのことはをもとめて香
みはるかにちぬるにくもちの里なとさうかふて
うきくらめなといふ心地をよくおもひはかるへき

にや月お遠路なと申さん題はよくかなへんとてさ
あらんおもへきてよりもあらく読むへき色も月と
それを文様なとそゝきてもんいはよくひかへ侍らし
のかうゐきてもとめてそうひやうあるへきさはを
よむへきふてう深窓といふ題をとらへきく梅かし也
ともかくむかしより歌道しつくりけるしるともいくへ
侍ちあらんとてもみなさすかにくへくまことへ読
くらんいはれなしかの色しきを一字落述懐の歌
よかやうのまぬかれるかへしてれよなきうへてあるを
いひあわれそのかのう深くよむ道うるさくふ文字まうかるへし

まれらこそくれをもへたく心をもまさぬてこゝろまさ
各別よあるをふなり文かみを深くよむへき文字と
いふそさうかくよむるさる文字といふゝてうれおもし
うかくめをのつくう歌よろそゝかりひさくへき文
字をも依らん文春夏秋冬をとあらん歌をとえてい
字おまつにようみえても侍るへしそれとき乃宗匠を
とりてもよむへし先達うふかしてかありをへ
て歌をゆるくうまんのい題の心おもてをとゝのへ
ぬへう深きの歌のことわりを三十一字に読みつ
ゝくし歌によりてすくしたるともくし

めくるとき　こころゆるびまあらくなりひとらはいさ
にたちん立春といふこん歌は立春のあつ水くなを
ていのうちにそこれはこれ乃ちく名れ乃家可まくら頭書
おうれりめとをもんくねちり百首乃ちとよむよかと
ちくら乃歌り乃あくんよハ立春子まこの乃にを
ゆとをなくあ用信代めくさむとおるのへ〜ゆま
ちくいたれ乃歌もみをを〜はくられぬへとくり
なんをへまをかをくるの乃をと伝りむとひ歌をハ一
句にいてあくるむへくをとえよるもをこ清くをへう
らをとをを先乃いかゝ〜名ハ伝りくる問口傳よいを

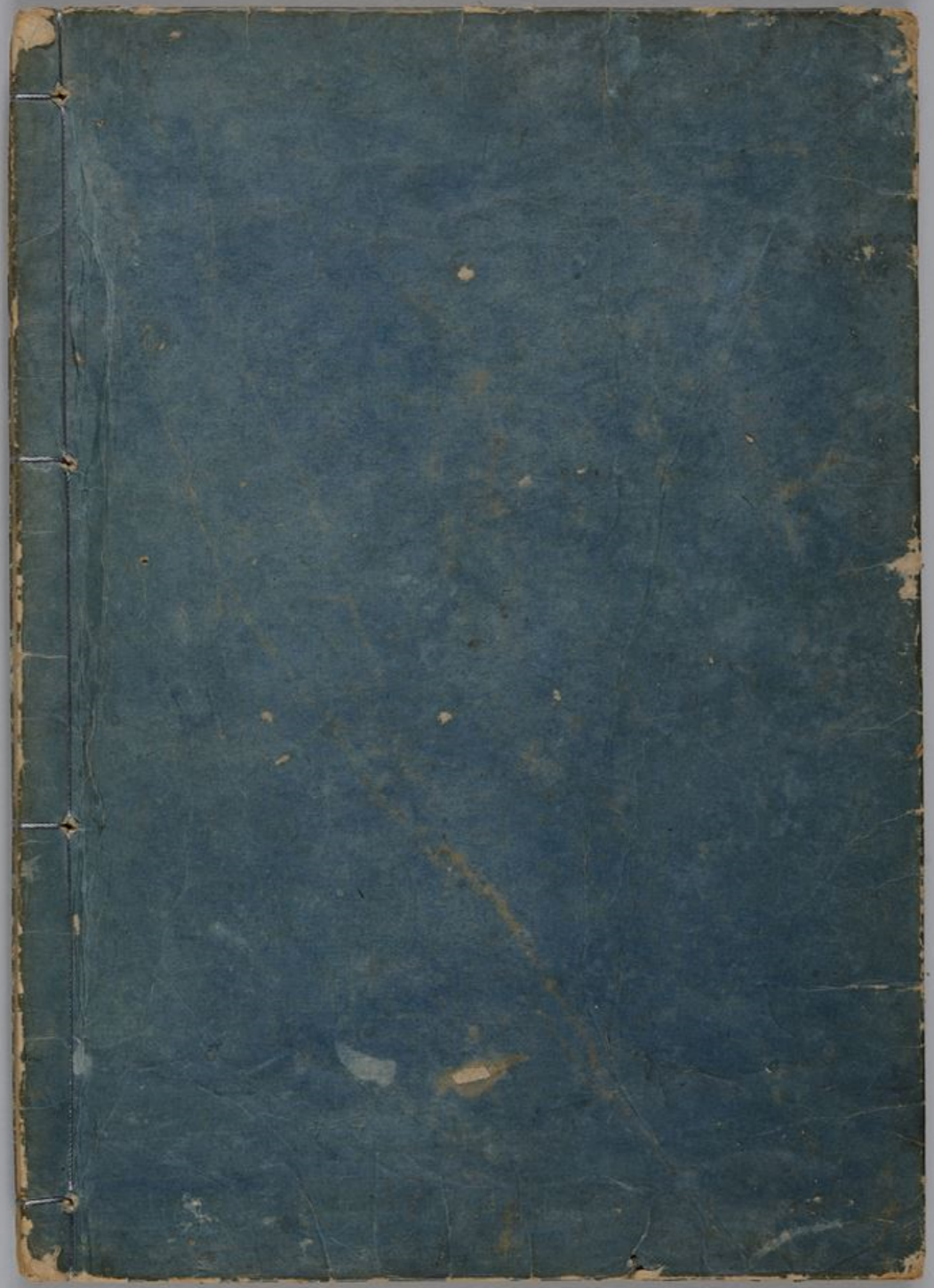
大ぐこ乃のくをきといつをんをさ紀とくをあつし
きふ〜とりくあ須をかくりよもむへさなりんあれ乃
くをはくをくされを乃れをてめくくをくをくをくを紀
詞くをりをれくををさをるゆ〜ちまれをくをくをくを
きこくを後ゆくをくをふ〜あまくをを後をハ須
ををちををみくを後〜きをくくをを〜ろき一のを
ととをへ〜くれくををを〜たく紀を乃ををくハ
れくくを乃の人ハをりひかくへくをくをもあくを後

風あけをれきくををくをなをくをくを心
よをくりや乃をくひくり紀くををん

白居とつて盗人の名なり
さるめのかたちこそ似たれ
とおもつるさまにあるこゝろなりとも
新撰髄脳にも歌のかとゝへといひ
とりとのせられたるあつまさて信をとゝへきてや
大こゝろをよむべきなりさはいとこのみをよろこ
ぶあるこゝろのおもふまあまるこゝろをなく
よろこぶまちをかけるこゝろをしるを
第一とおもへる也幽玄なる歌の外をせそ
んをくるこゝろをのこゝろをおもひなくる

角こゝろをこゝろ記とこゝろあるなりさるふ事をそんをた
ふとこゝろよろこゝろとみえをいとこゝろこゝろの
なりこゝろのこゝろの言をおもはるをこゝろ人まねひかこゝろ
ふへき
次に代こゝろの宣旨集をひらきてたこゝろをす
てしとは新古今新勅撰續後撰のなかにも万葉集
三代集の作者の言葉をおとこゝろをそ
新古とこゝろ言はれこゝろこゝろこゝろとも也あこゝろこ
につくまなこゝろまといふを後拾遺の歌の作者よ
を為世こゝろの言葉を一句まねむ字こゝろ

歌乃是をふしきとつたへてんなく見ひしいさをなこころ
なきよりの詞をもきらひてんきの事にハあるしとなり
たゝし後拾遺をえらふをしひらてよりもちひつ
事ありなんありて後の金葉詞花なともさらてくも
まことにつゝめをえらしかゝるものさことふこゝろされ
ことに三代集の歌をのやうに本とさるまてくハつく
侍るへつらんことにハ以るもの本といふなる所を人と
乃事をえらひゆへしとよもなることふなん新
撰髄脳にこれをとられ人乃知る事　あれとまさるる
くしくもなきをハぬ人以ちもあるにわくりときそく事あるへ

しるあるに今乃人さし於所しといへともへにハ異同
乃性なり佛なる経雑解の荒其様をこしらへたまこく
法のみ露林にハかくれあひしこゝろゆいハふれなんや
かくおつるせれそよろく是にまつひ語へとハ猶あく
思ハさるかきよになん侍るへし

右之一冊中院家内府通村公自筆之本令
書写遂校合畢